

スタンダード研究覚書

——大革命前後——

藤 原 裕

「革命の世紀は近づいた。その時になつて、我が身がどうなるか誰が答え得ようか。」一七六二年、ルソーは「エミール」に書き記した。けれどもその実、十八世紀の哲学者らが革命を予測したかどうかは知り難い。革命以後に人々が彼らの著作の中に神託を見出し、彼らの銅像をパリの方々に建てたにすぎなかつた。にも関わらず哲学の世紀が押しつまつて来るに従い、大革命の気運はパリのみならず全フランスに拡大していった。偉大な啓蒙者達は革命を見ないで悉く死んだ。一七七八年にはヴォルテールとルソーとは相次いで亡くなつた。彼らの死後五年、デイドロの死ぬ前年にアルプスを見るかす市グルノーブルは、第三階級から偉大な「エゴチスト」を生んだ。

グルノーブルの、今日ジャン・ジャック・ルソー通りと呼んでいる街は当時ヴィユ・ジェジュイット通りといつていた。アンリ・ペールが生れたこの街で、その父シエリュバンは弁護士をしており、暮しも豊かであつた。ペール家は十七世紀の初めに、オートランスでアムプロワーズ・ペールという商人の名を見出すのに始まつてい

た。ランスで羅紗商人であつたアムプロワーズの子から貴族と平民の二つの家柄が發した。即ち長子ピエールは貴族になり、次子ジョセフがグルノーブルの高等法院ベルマンの代訴人になつた。ピエールは一七九九年に死んだ。ジョセフこそアンリの祖父に当る人であつた。アンリの母はもとアンリエット・ガニヨンといい、コンタの出身であつた。ガニヨンは十六世紀にモントウーで百姓であつたという。

しかしそのイタリー人の血統は未だ証明されていない。それから土着の地をあとにして街に出でて紡績工場を経営する者が現われ、その子アントワヌというのばグルノーブルで外科医となつた。アンリ・ペールの母方の祖父アンリ・ガニヨンはアントワヌの子で二十四才で開業医となつた。

父ペールはいつも難しい不機嫌な顔をして息子にはかつて愛されぬ父であつた。息子は充されない愛情を全て母に注ぎ、後に母が最初の愛人であるときまでいつた。母アンリエットは少年ペールが七才にもならぬとき死んだ。母がいた部屋に入つて、黒い布のかげられた棺を見たとき、少年は激しく絶望したが、このとき始めてこれが

死というものと知つた。叔母のセラファイはこの態度を非情だといつて責めた。セラファイは母の妹で少年にとつては厭な怖ろしい存在であつた。死んだ母は少年ベールに二人の妹を残していつたが、上のポーリヌはやさしい性質で、兄との手紙が多く遺つているけれども、下の妹ゼナイドはよく彼のことを父やセラファイ叔母に告げ口して、少年ベールにスパイと罵られていた。

アンリ・ベールの母への追憶は故人の書斎から彼女の愛していたダンテを見出すにつけて強く甦つた。母は六度目の妊娠がもとで倒れたのであつた。

アンリの母方のガニヨン家の人々は、彼を教育するという大きな役割をつとめた。叔母セラファイが彼に厭な想い出しが残さなかつたとしても、祖父ガニヨンの妹エリザベード大叔母は常に彼にとつては最も徳高き人であつた。

併しアンリの感謝は専ら祖父アンリ・ガニヨンに向けられる。この祖父は敬虔で寛大な心を持ち、ヴォルテール崇拜者であり、屢々オラースを引用したりした。彼の知的な態度が寡黙で注意深いアンリに影響を与えぬ筈はなかつた。祖父の家はぶどうの樹が蔭をなす露台に面していた。幼いアンリはそこで毎日のように忘れ得ぬ数時間を通した。サスナージュの山頂、ヴォレップの山肌が暮色に没し、サン・タンドレ寺院の鐘が日没を告げるとき、祖父と二人きりで過した夏の夜のことを、アンリ・ベールは愛すべき描写として我々に伝えている。星が二人の頭上に輝き始める。と老人は少年に天文学の話をし、科学や詩のたしなみを教える。老人はアンリに、「人間の心を知ること」を屢々言いきかせたのであつた。

母の死以来、アンリは父とセラファイ叔母につれられて不快な散歩

を強要された。彼はよくグルノーブル南方二里の、父の領地フエロニエールに滞在したり、祖父の領地フォンタニルの近くのサン・ヴァンサンサンにも幾度となく遠足をした。彼の家にはこうして小作地がいくつか残つていたのである。フクロニエールの地所は一七二二年にベール家のものとなつたが、父ベールの死後、一八二〇年には売却された。リヨン街道筋にあるフォンタニルという村落に近く、祖父ガニヨンは別邸を持つていた。一七八八年の秋、この邸は業火にかかつて焼失した。

祖父ガニヨンは十九才の時、一七四七年七月にあつた、オーストリー継承戦役のさなかのラシェットの戦いについて少年ベールに物語るのであつた。祖父の父はしつかりした人で、彼を軍医として戦場に送り、気骨を養うようにしたのだ。

一七九一年、アンリは叔父ロマン・ガニヨンの家で数週間を楽しくすごす。ロマンは前の年に結婚し、エシエルの小川のほとりに定住していた。時の流れの中に、固苦しい家で生長した少年は自由に飢えていた。自分のことを家族に理解されていないと思つて孤独に苦しんだ。後年彼は父及び最初の師らに對し抱いた嫌悪を、生れ故郷に投げつけねばならなかつた。

「グルノーブルは私にとつて嫌わしい胸のむかつくような想い出である。そこでは危険はないが怖るべき嫌悪感がある……。」
それにも関わらず彼はドーフィネ人であつた。彼はこう書かねばならなかつたのだ。

「ドーフィネ人は反省をし、自分の心と語る。」と。

併し十才になるとアンリは既に周囲の人達を判断する。そして彼

は他人が自分に何か教え込もうとすることに反対した。彼の父も、家庭教師も、敬虔な、そして熱心な王党で、アンリを社交界の儀礼を重んじるように教育しようと骨折る。後に過激的になり、無神論者になるかもしれないアンリは、自然さがかけものとして社会的儀礼にはやはり反抗的であつた。

この時期になると、反省的だが頑迷で、神秘的なところがあり、学校で遊ぶときも同年輩の友人らと交わろうとせず、自分のみに満足し孤独にありながら愛情を求め、その中に渴し切つた魂を浸らせている彼が見られる。

アンリ・ベールは最も明晰な鞏固な幼年時代の印象を持つ人のひとりである。「ブリュール」に見られる一生は少年ベールの多くの想い出によつて判断されたものである。その判断は想い出の上にじかに基礎づけられたものだ。彼の父や、セラフィ叔母や、祖父、亡き母のやさしい幻、友人達が彼にたえず感受性というもののさまざまなタイプや規準を与えている。

彼は手に入る限りの本を密かに読んだ。多くの本は父に禁じられていたのだ。祖父の書斎から「コンフェッション」を盗み出したりする後になつて漸時感銘の薄らぐこのルソーも、発見当時は素晴らしい印象を与えた。「新エロイズ」に熱狂した彼は、ジュリーやサン・ブルウの住むスイスの風景に憧れる。既に「ローランの歌」は、アリオストの訳詩により彼の夢の大部分を占めていた。ブラダマンテの導きでこの上なく熱狂的な恋愛を想像してみても快がつた。イタリーの夜を彼の頭に再現させるチャローザの音楽は、同じ幻想をアリオストの中にも見出す。アリオストの翻訳はトレサン伯爵の手に

なり、一七八〇年にその第一版がでた。伯爵の息子が一七八六から一七八八年迄グルノーブルに駐在していて、本は彼からベール家にもたらされた。アンリ・ベールはシェークスピア、セルヴァンテスのと共に、アリオストの伝記をも書こうとさえ思つていた。「新エロイズ」を読み如めた訳は、専ら彼の母が生前この小説に絶対的な愛着を持つていたからだつた。それにも拘らずベール少年はサン・ブルウの慎重さが自分にオネ・トムの資性を与えるものだと思ひ、涙を流してこれを読み、貞節に対して感激した。「ドン・キホーテ」は死ぬ程の笑いを彼に与えた。母の死以後、貴族的で宗教的な厳格な教育のうちに、笑いを忘れてしまつた少年ベールにとつて、この本の与えた効果は想像するに余りある。この本の発見と、これをシナの木の下の窪地で坐つて読んだことは彼の生涯に大きなエポックを劃すものであつた。「危険な関係」も彼の愛読した小説であつた。ラクロは事実砲兵部隊の副隊長として、一七六九年から七五年まで六年間グルノーブルに滞在した。この市の想い出は小説の中に多く盛られていた。ベール少年はまた勉強しているふりをして屢々アベプレヴォの小説を読んだりした。これらの小説は彼をして、今まで暖昧なロマネスクの中で楽しんでいたことから脱し、正確なイメージを見せることに役立つた。

ヒュームとスモレットの英国史は、それぞれ彼に歴史小説の夢を抱かせた。ヒューム「英国史」の仏訳は一七六三年から六六年までの間にアムステルダム出版社から十八巻になつて出ている。初めの十二巻まではプロ夫人の訳筆になり、あとの六巻はアベ・プレヴォの手によつて訳された。ベール少年が特に好んだチャールス一世の話はこのあとの方の巻にあつた。尚おスモレットの「英国

史大全」はJ・B・タルジュにより仏訳されたものである。

自分の家の蔵書であき足らなくなると、ペール少年はグルノーブルの図書館に出かけた。この図書館の最初の起りは一七七二年に、ジャン・ド・コレという人の蔵書を購入することに始つた。彼はグルノーブルの司教という地位にあつた人である。当時グルノーブルの知事は、一七五三年から九〇年まで在任したマルシウ侯、ピエール・エメという人であつたが、この蔵書の購入にはドクトル・ガニオンも一役買つた。

ペール少年がそこで読んだのは主としてコルネイユとモリエールで、後者は特に彼をして劇作家になる夢を起させた。彼はコルネイユをラシーヌより数倍も偉大であると思つた。彼はラシーヌをひどく嫌つた。その延人らしい言葉づかいの巧みさが気に入らなかつたのだ。ラシーヌの主人公たちは全て不道徳で、その劇的葛藤は血なまぐさいと決めてかゝつていた。彼は「オラース」を最も愛し、「ルシッド」のように美しい」という表現を屢々に用いた。

一七六八年以後、グルノーブルの劇場はサン・タンドレ広場の隅にあつた。今日のそれは一八五三年に再建されたものである。ペール少年は叔父ロマンにつれられて劇場に行つた。叔父ロマン・ガニオンはグルノーブルの弁護士で、若々しく、父ペールのいかめしさを嘲つている人で、社交界でシェリュバンがまだ支払済みになつていない美しい服を着ていたのに出会い非常に驚いた。「俺は忽ち雲がくれたよ。」とこの時の模様を、叔父ロマンは笑いながら少年に語るのだつた。

祖父ガニオンは文学に対する愛情から、少年が劇場に首つたけなのを厳しく反対するということとはしなかつた。「実際この子は気狂

いだよ」と、アンリが劇場から戻つて来ると言つたものだ。

革命の嵐はアンリ・ペールの身辺にも吹いていた。反革命主義者のブラック・リストが一七九三年四月二十六日、グルノーブルで書かれた。これは五日前にこの街に着いた二人の委員の手になつたものだ。一人はグルノーブル生れのアンドレ・アマールという弁護士で、既に国民議会からイゼールの委員として派遣される前に、この市の多額納税者のリストを作つていた。も一人はジャン・フランソワ・マリイ・メルリノといい、エーヌの委員であつた。このリストにはシェリュバン・ペールとライヤヌ師の名も載つていた。シェリュバンは一七九三年五月から翌年七月二十四日迄三度に亘り拘留された。ガニオン医師の名はこのリストには載つていなかった。

ライヤヌ師は前年九二年の十二月にペール家に入つた。彼の前にアンリの家庭教師だつたのはズベール氏で、グルノーブルの方言で下司とペール少年が称したくらい、田舎出の術学者であつた。ラテン語の活用を実に乱暴に教えたので少年には彼が何もかも厭な奴に思われた。その後継者のライヤヌ師は言葉のあらゆる意味で「腹黒い奴」であつた。アンリには彼が、犯罪を犯しているのではないかと疑われる位表情の固い、凡そオネートなものに対する敵のように思われた。ライヤヌ師はプロヴァンスの村落の生れで、大低くやせて青白い顔をしており、時々偽善的な微笑を浮べた眼つきをした。父ペールは明らかに虚栄心から彼を雇つたのだつた。というのはライヤヌ師が以前大臣がでているペリエ家の家庭教師をしていたからだ。ペリエ家はこの地方きつての富豪で「ペリエ殿さま」といわれたクロード・ペリエは、大臣カジミールの父であるが、死後五百八十

万フランの資産を遺した。ドフイネの陸軍中将レディギエールがその昔ヴィジューの古城を獲得し、一六一九年に再建したものを、クロードが一七八〇年に買いとつた。一七八八年七月、プロヴァンス派遣軍のためにクロードはこの城館を提供している。

シェリユバン・ペールが属していたグルノーブル弁護士会の幹部に中央から四十人の枢機官會議で任命された弁護士たちが赴任した。彼らは貴族と納税の上での特権を有し、懲戒裁判に権力を持つていた。父ペールは高等法院が解散される前までに、渴仰的であつたこの地位を得ていたものと思われる。シェリユバンは始終地所を買つたり売つたりすることは考へてゐた。この上なく抜け目のない男で、百姓たちに売りつけたり彼らから買つたりするの慣れ、アンリの言葉を以てすると「極付きドフイネ人」であつた。

ペリエ家のことや、父のことを考えるとアンリは苦々しく思つた。この性格は祖父から受けたものであつた。祖父の家では、「金銭について喋つたり、この金属のことを口に出して言うだけでも下劣なこと」とされてゐたのだ。

こうして恐ろしいライヤヌ師のもとにあるとき、九三年の一月にルイ十六世の計報がグルノーブルに伝はつた。この「愉快な出来事」はペリエ家の者を狼狽させた。ブルジョワ階級に属しながらそれでも貴族社会の端くれにいと自惚れてゐるペリエ家の人々、とりわけ零落貴族を以つて自任してゐるシェリユバン・ペールは、凡ゆる新聞を貪り読み、まるで親友や肉親が同様に処刑されるようなことがあるかもしれないといった風に王の裁判については特に関心を寄せた。「まさか奴らはこんな辱すべき判決を執行しやすまい」と宣告の報せがあつた時家族の者は言いあつた。「彼らが判決を放棄する

なんて、どうしてそんなことがある」とアンリは思つた。

少年は夕方七時ごろ（一月二十一日）父の書斎で、父と一つの机を隔てて本を読んでゐた勉強する恰好をして実はアベ・プレヴォの「メモワール・ダン・ノム・ド・カリテ」を読んでゐた。室は道路に面してゐたが、リヨンから、パリから到着する車の音で揺れ動いた。「怪物どもが何をしたら見てこなければ」とシェリユバンは立ち上つた。「裏切り者が処刑されてしまえばいい」とアンリは考へてゐた。この時彼は、自分と父親との感情のあまりにも違いすぎるのを感じた。少年はいつも祖父の家の前のグルネット広場を通つて行く軍隊を見るのが好きだつた。秘密文書一枚で兵隊の首を切ることでできる裏切者の命くらい何だ、と彼は思つた。シェリユバンは帰りざま吐息をついて「お終いだ、奴らは陛下を殺したよ」と言つた。アンリは生れて以来の喜びを感じた。

「恐怖時代」はグルノーブルでは大して「恐怖時代」でなかつたので貴族達は配下を派遣しなかつた。しかし「グルノーブル・ジャコベン党協会」は一七九四年に「希望軍」の名を以つて八才から十八才までの若い市民を訓練することを決議してゐる。これらは祝日の際警察の役割をもするものであつた。アンリ・ペールも調査名簿の中にあつた。しかし家族の者が彼をしてこの集合に参加させるのを免れさせた。ペール少年は行進する青年部隊を見て加わりたくてならなかつた。彼はこれこそフランスから坊主臭を一掃する唯一のものだと思つた。

アントワヌ・ガルドンという人が九三年に僧職を放棄してグルノーブルの共和制主義者組織の中で重きをなす地位についた。彼は「希望軍」設置やその司令について何らあづかつたのではなかつた

が、若いペールはガルドン神父の恐ろしい名を屢々耳にしていたのでこの仔細を知らなかつた。ガルドンが「希望軍」を指揮するものと思つていた。

アンリ・ペールは血を見るのに殊に恐怖を示した。革命による流血事件を初めて見たのは少し前にグルネット広場に於いてであつた。アレクシ・ジェイという三十になる帽子製造工が八九年の六月十一日に銃剣で突き殺されるのを見た。

彼を殺した部隊の下士官の一人に後にスウエーデン王になるペルナドッテが居た。當時は王国海軍部隊の曹長であり、一七八四年以来グルノーブルに駐屯していた。彼はリセー街の角で傷つき、その時その道を通りかかつたから商人のルフェールが喘いでいるペルナドッテ將軍の命を救つた。シェリュパンの友人であるルフェールは以来そのことを得意げに屢々語つた。

その頃祖父ガニヨンの家に羅紗商人の子で貴族になつたジョセフ・ムーニエという男が出入りした。彼は革命時代にはエミグレレーであつたが、その後フランスに戻つて執政官ボナパルトに加盟しレンヌの知事に任ぜられた。彼の長女はヴィクトリーヌといひアンリ・ペールと同年であつたが後に彼の青年時代の最も大きな恋の一つを生むことになる。息子エドワールは平凡な男だが小賢しく、カジミール・ペリエ大臣のように真のドFINE人の典型であつた。祖父ガニヨンは、労働を愛する全ての若者にやさしかつたから當時まだ若かつたムーニエ氏に親切でよく本を貸してやつたりした。ペリヤ・サンープリという人がその「ムーニエ氏の物語の讃辞」といふ本に、ドクトル・ガニヨンのムーニエの若き日に於ける援助を証明している。青年の労働に対するドクトル・ガニヨンの愛情は彼を

して若い共和主義者をひきさすことになつた。

若きバルナーヴはその家族と共にサン・ロベールに別荘を持つていた。サン・ロベールはガニヨン家の領地サン・ヴァンサン^{サン・ヴァンサン}の近くで、バルナーヴは九二年八月にサン・ロベールの邸で逮捕された。彼は翌九三年処刑された。

セラフィ叔母は隣人のバルナーヴを嫌つていたので彼の死に喝采した。そしてサン・ロベールを通る度に「あゝこれがバルナーヴの家だね」と言つてその家を狂信者のように扱つた。

アンリがエシエルの叔父ロマンの家で過していたとき彼はそこでリヨンから逃亡して来た美しいリヨン女を見たので恐怖政治はその時既に始つていたのだと思つたがこれは誤りで、リヨンで恐怖時代が始つたのは一七九三年十月に共和国軍隊がそこに侵入したときからであつた。アンリのいうリヨン女はコシェ嬢といひ、ただ母と恋人を伴つてリヨンからエシエルに來たにすぎなかつた。ジョセフ・ドメーストルの「手帳」に「リヨンのコシェ嬢が、エシエルから予の家で夕食をとるためガニヨンを伴つて來駕」とある。

ロベスピエール失脚の報せがグルノーブルに着いたのは、シェリユバン、ペールが放免になる十五日前であつた。「農業経営者ハ家庭ニ復帰サスベシ」との布告があつた爲である。父ペールが獄舎生活をしたのは約十六カ月に過ぎなかつた。スタンダールの言つてゐる「二十二月」といふのはそれ故執行猶予の期間を差引かねばならない。

二日目毎にパリから来る郵便馬車が、祖父ガニヨンの家に五、六の新聞を届けた。それの中には「自由人新聞」^{自由人新聞}、「デバ紙」^{デバ紙}、「祖国防衛者」^{祖国防衛者}などがあり、祖父が風邪でも引くと、アンリがその読み

手に任ぜられた。

アンリ・ベールが十四才になったとき、グルノーブルにエコール・サントラルが創設された。これは一七六三年に耶蘇会の学校に替えられていた古い学校の中に創設されたもので、今日は女学校となっている。エコール・サントラル当時各県に開設され、幹部には県から任命された委員会があたり、それは三人の委員で構成されていた。ドクトル・ガニヨンも一七九五年、委員のひとりになった。グルノーブルではその開校式が九六年八月二十一日にあり、ドクトル・ガニヨンは演説にこう述べた、「科学は思想を増大し、文学はそれを人生の魅惑たるものと為す云々。」彼は学校行政刷新の際、九八年六月に免職になった。

第一年度の講座は九六年十一月から翌九七年九月の半ばまで続いた。アンリがこの学校に居たのは九六年の開校から九九年までまる三年間であつた。

この頃叔母セラフィが死んだ。九七年一月で三十六才で、あつた。アンリはこの時膝まついて天に感謝した。彼は一八三五年になつて、「もしパリの人々が一八三五年と同様一八八〇年にも愚かであれば私が母の妹の死をこう思つていたことで私に野蛮だとか残忍だとか非難するだろう。」と書いている。

エコール・サントラルの教授連は、まづラテン語がデュランであつた。「どうして彼の講義を聴きにエコール・サントラルに行かないということがあろう。セラフィ叔母が生きていたら、彼女だつてそのわけがわかるだろう。」ガッテルは文法と論理学を教える。デュボワ・フォンタネルは文学の教授であつた。トルセは化学、ジェイ

はデッサン、シャルヴェが歴史、テュビュイが数学の教授であつた。

ジャン・ガスパール・デュボワはグルノーブルの人であつた。パリに出て文名を挙げたときフォンタネルの名を称した。彼は「^{ガゼット}双橋新聞」をその一七七〇年の創刊から七六年六月まで編集発行した。

一七六七年に彼は「オーヴィッドの翻訳とエリシイ或はラ・ヴェスタル」という悲劇を書き、後者は同じ年にコメディー・フランセーズで上演されたがやがて禁止になった。宗教上の宣誓についての問題を扱つていた為であつた。同じ悲劇「メラニイ或は修道女」もラ・

アルブがアムステルダムで印刷を禁じた。彼はパリに出て、ものをかくという条件で百ルイの年金にありついても、（これは一八〇五年のウインに於けるベートーヴェンと同じであつた。）彼は「美」の追究、即ち自然を模倣するのでなくヴォルテールを模倣したのであろうとスタンダールは言つてゐる。フォンタネルはベール少年にギボンの「羅馬帝国衰亡史」の第一巻を貸してくれた。これは一七七六年から六巻になつて連続刊行されたものである。アンリは彼がこの本の題名を発音するのに、「デ・イストリー・オブ・デ・フォール」と言うのが、如何にも可笑しく思われた。フォンタネルは英語を独学でやつたのだつた。それは彼が貧乏だつたことにも原因するけれども辞書の仕業なのだとアンリは思つた。祖父ガニヨンも彼を好まなかつた彼を全く虚栄心の強い男で、文学者として祖父ガニヨンは、この男に悲劇を書いたというだけで横柄にされるのが我慢できなかったのだ。

こうした師の間に、あつて彼の勉強ぶりはしかししめであつた。彼の生活はここから新しい方向をとる。彼はここで自分を理解してくれる友や、敵意をもつ友を見出した。

親しい友のうち、特にルイ・クロゼとはラ・フォンテーヌやコルネーユ或はシェークスピアに関する文学的雜録を集めた「カラクテール」という小冊子を書き、一緒にアダム・スミスやセイを読んだりした。

敵意を持つ仲間に対しアンリ・ベイルはひどく憎んだ。判つていはんいでは彼は生涯に四度決斗をしている。

一、モオリス・オドリユと一七九七年頃。

二、アレクサンドル・プチエと一八〇〇年、ミラノでサーベルを武器として。スタンダールは足に負傷した。

三、侍従長ミュンヒハウゼンと一八〇七年ブランシュヴィツクで。

四、司令官ランドルと一八〇九年ウィーンで。

右のうち第二のものを除いては、これらの決斗は決斗場所に来るまでに調停された。

エコールに在学中、オドリユというヴェルスウ出身の成績の良い、アンリより一つ年上の少年が居たが、彼はオドリユの態度が田舎じみていと思う、互いに反感を持つていたところ、ふとした口論から決斗になった。成績のよいオドリユは、アンリの言う程実際には田舎者ではなかつた。体格のよいオドリユになぐられそうなのにアンリはびく／＼していた。併し夕闇が迫り決斗は中止された。

アンリは勤勉な学生たちの間にまじつて勉強にいそしんだ。彼はコンディアック派の論理学や、シェークスピアの名が出てくる講義に特に熱中した。一七九八年九月、彼は文学に一等を獲得し、友人や教授らの注意を引いた。同じ年に既に彼は数学の賞を抽せんする筈である十五人の生徒の中に入つていた。こうして彼は数学にも没頭

した。それは彼がこの学問に夢中になることによりグルノーブルを去る方法を考えていたからであつた。

彼は亦少しばかり自由は享樂した。彼は劇場で可愛らしい歌手を見識つたが勿論彼は声をかけることできなかった。それはキューブリ嬢という女優であつた。本名をマリイ・ガブリエル・ラモンといひグルノーブルで最初のうちは本名で舞台に出て居た。アンリが彼女を見た時は彼女は既にスイス人の俳優メルシオル・キューブリイと結婚していた。アンリが彼女の唄を聴いたのは一七九七年十一月から翌年四月の間で、この劇場に彼は漸時しば／＼出かけて行くようになり、いつも平土間でつつ立つて見ている彼の姿を人々は見かけるのであつた。彼女は丈高くすらりとして美しい風貌を持ち、顔は真面目だが時々メラニコリックになることがあつた。フロリアンの「クロデース」を演るとひときわ冴えているとアンリは思つた。フロリアンの原作は小説で、これはビゴオ・ルブランが三幕物に脚色したものであつた。彼女はまた、アリアを含み、マルソリエの台詞、ガヴォの音楽になる一幕の田舎芝居「無効契約」の中で貧しい弱い声で唄つた。

しかしこれがアンリ・ベイルの音楽への愛情の始まりであつた。それは彼の情熱でも最も強いもので、金がかかるがそれでも五十二年も続きいつも生き／＼した情熱であつた。

ベール少年はまたキューブリ嬢がグレットリイの「野暮な試練」を演じるのを見た。当時グレットリイはフランスに流行し、彼の為にマルモンテルがオペラの台本を書いた。

アンリはエコール・サントラルで勉強を続けていたが、九九年九月に数学上級で一等賞を勝ち、益々数学への愛好心を深めた。数学の精神は暖味なもの、は全て虚偽とした。彼はエコール・ポリテクニクの受験の為霧月十九日パリに上る。パリではブルゴーニュ通りとグルネル街の角にあるホテルに投宿した。彼の為にこの宿の一室をとつておいてくれたのはグルノーブルのエコール・サントラルの旧友たちであつたことは容易にうなづける。

パリでアンリが第一に心がけたのは試験のことを忘れることであつた。エコール・ポリテクニクは多分彼の眼に最も現実的な魅力としてうつたであらう。我々は彼が小説を書くとき、その主人公らがどんなに幻惑的な魅力を欲していたが判るのだ。彼のつもりでは、本を書いて自由に生活しようとした。彼はそれから下宿をサン・ドミニク街とグルネル街の間にある、エコール・ポリテクニクの学生の居る下宿に替える。ここに屢々グルノーブル時代の先輩であり、アンリの友人として名を挙げられているシナール、アリベール、クロゼが現われる。

だが山というものを持たぬパリはアンリ・ベイルを欺いた。彼は自分が孤独になつたと思つた。屋根部屋の汚れ、ひとり食事するもの憂さ、泥だらけの道路、冷やかな人々の態度、こうした凡ゆるものが彼を不快にし、不安にさせた。彼は自問する、「パリが俺を気に入らぬと言つたら、俺は何を愛したらいのか。」こうしてアンリは幸ある愛の夢をひたすら望む。併し安易な恋愛は彼にはおぞましかつた。彼は遂に病いに倒れる。その時ガニヨン家の親戚ノエル・ダリユが訪れ、自宅に引きとる。アンリはやつとダリユの邸で健康をとり戻した。ノエル・ダリユはドクトル・ガニヨンの従弟で

あつた。アンリ・ベイルが巴里に着いたとき、その長子ピエールは軍に居いてスイスに駐屯していた。ノエル・ダリユは最近リュウ街に十八世紀の些やかな館を得たばかりであつた。これはビシー侯爵の古い館でコンドルセが所有していたのをノエル・ダリユが買ひとつた。コンドルセはヴァランヌで王が逮捕されて以後リュウ街に居たのであつた。

ダリユ家でアンリは世間を知ることを選び始める。家の中では不器用で臆病で、だまりやであつたが、かなり暇で退屈な生活をした。新しいモリエールたらんと戯作を試みた。

従兄ピエール・ダリユが彼を陸軍省に勤めさせようとしてそこへ連れて行つた。常備軍司令官がロムバルディ侵入を決定したときピエールはアンリを誘つて従軍の為パリを出発した。一八〇〇年五月七日であつた。旭日の如きボナパルトの名が響いていた。ジュネーヴでアンリはルソーの生家を訪ねた。サン・ベルナールを通つてバール城塞の砲火を見た。ノヴァラでチマロトザの「秘密結婚」を見てアンリは甦えつた。「私の生活は一新されパリでの私の失意は地に没した。私はこれら幸福がどこにあるか見極めたい……イタリイに住み、音楽を聴くことが私の想像力の基盤となつた。」